

座談会

特集インサイドストーリー

3・11。茫然自失の瞬間から 復興再生の来る日見つめて

あの日、被災地の農業は一変する。多くの農業者が現実には立ちすくむ。だがしかし、立ち止まることなく、再生に踏み出した農業者もいる。仲間が亡くなり、生かされたからにはひとときも休んではいけない、と。そんな気概と想いで再建に立ち上がり、奮闘した農業者たちが、五年後の今、明日の農業の時代を語る。

●有限会社アグリードなるせ

宮城県東松島市
稲作40ha、畑作50ha。津波でほ場が浸水。施設・機械も流出。被災1カ月後から除塩作業を開始し、一部で2011年産米作付け再開。被災前より規模拡大。



●有限会社岩徹養豚

青森県上北郡おいらせ町
養豚・母豚二〇頭。津波で豚舎は、ほぼ全壊。被災一カ月後経営再建を決意し、二〇一二年九月新豚舎を建設して飼養再開。



●株式会社オヤマ

岩手県一関市
養鶏常時一六四万羽。原発事故の影響で福島県飯館村の生産拠点で操業停止。宮城県気仙沼市の加工場が津波で全壊。雇用維持のため岩手県一関市に簡易鶏舎を設置し、ブロイラー生産を再開。



●有限会社サンフレッシュ松島

宮城県宮城郡松島町
施設野菜トマト1ha。地震で温室が破損したが、すぐに復旧に着手。2011年7月から定植し、9月中旬出荷再開。

■出席者(敬称略・五〇首順)

安部 俊郎 (五八歳)

有限会社アグリードなるせ 代表取締役

岩崎 徹男 (六八歳)

有限会社岩徹養豚 代表取締役

内海 正孝 (五九歳)

有限会社サンフレッシュ松島 代表取締役

小山 征男 (七〇歳)

株式会社オヤマ 代表取締役

田口 克幸

日本公庫農林水産事業本部 特別参与

司会 コーディネーター

大泉 一貫

宮城大学 名誉教授

一時は災害に茫然自失

大泉 まずは皆さんの経歴と経営概要を教えてください。

岩崎 三〇歳で脱サラして事業を興し、震災前は母豚二〇〇頭の一貫経営をしていました。現在、肉豚を地元のスターゼンという販売会社に売っています。

安部 営農指導員として一五年ほど農協で働き、三五歳で退職しました。米、大豆、麦など約一〇〇畝の水田農業と、周年雇用を実現するためにジャガイモ、キャベツ、ハクサイなどの園芸作物も作っています。販売は農協が中心で、直接販売は二割程度です。

小山 昭和四四年に会社を設立しました。今はブロイラーの養鶏と処理加工がメインです。一日の処理羽数は四万羽、年間二八〇日稼働を維持してきました。直営農場での生産が七割、農家との契約生産が三割で、販売の約九割は関東で、地元は一割程度です。

内海 トマトの施設は一畝で、グッチライト型の温室です。脱サラして、平成二一年四月から生産を始め、震災の四年ほど前から一〇㊦当たり三〇㊦が安定的に取れるようになり、一〇㊦当たりの売り上げ一〇

〇〇万円を達成していました。従業員は生産や出荷に携わるパートを中心に一五人おります。主に地元の三つのスーパーに販売しています。

休まずやり遂げたこと

大泉 震災は昨日のこのように思い出されますが、皆さん、どのような状況だったのですか。

岩崎 地震で停電になりましたが、自家発電を使って翌日のために給餌をセットしようと豚舎で作業していた時です。津波が来ると知って慌てて高台に逃げました。浜には防潮堤がないため、高さ二・五〜三メートルの津波がもろに豚舎を襲いました。振り返ると豚舎五棟のうち四棟が倒れ、その悲惨な状態に茫然としましたが、二日後には再建しようと思えました。

大泉 えっ、二日後ですか？

岩崎 ええ。過去に一から立ち上げた事業であることを思い出し、頑張ろうと思ったのです。でも、それからが大変で、津波で逃げた豚の捕獲を近所の人に手伝ってもらいました。捕獲しても入れておく場所がないので殺処分しなければならず、全部処分し終わったのは七月初旬でした。

その後、豚舎移転のため山林と

畑地を二畝程取得しましたが、比較的スムーズに取得できたと思います。行政も間に入ってくれたし、災害に遭った時に豚の捕獲に協力してくれた近所の方々もいて、皆、大変なときなのに助けてくれてとてもうれしく思いました。

安部 私は野菜部会の役員会の最中に地震に遭いました。その後、津波が来る前に会社に到着し、従業員の無事を確認して、ほっとしたのを覚えています。しかし、地区では一〇人に一人が亡くなりました。田んぼで仲間を見つけた時の光景が今でも目に焼きついています。そして、生かされたからには一年も休んでいられないと決意し、すぐに作付け再開の可能性を探りました。

水田 の三分の二が一四日間も浸水して塩害がひどいし、自動車から何から田んぼに流れ込んでいる状態でした。国の予算も決まっていないうし、再開は皆無理だと言いましたが、なんとか協力してもらい、作付けできそうな所を三三畝程確保することができました。重金属の検査をして、除塩は県下で最も早く五月初めから行いました。

ほ場整備が終わって暗渠管が埋設されていたことで除塩がスムーズにできたのです。その秋、九七・

五%が一等米となり、驚くほどおいしい米が取れたことは忘れられません。あの時、休まずやり遂げたことが営農再開につながり、後の飛躍にもつながったと感じています。

国の支援待たず挑戦

小山 震災当日、私は中国の上海にいました。地震の一報が来た後は、全く連絡が取れなくなりました。とにかく帰らなければと、福岡、羽田と飛行機を乗り継ぎ、迂回路を探しながら車で二〇時間もかかって、やっと岩手にたどり着きました。会社に戻ると石巻、釜石、塩釜などの飼料工場が津波で全部なくなり、餌の供給ができなくなると連絡が入りました。

福島飯館村の農場は原発事故で避難地域となり、人が入れなくなり、鶏舎は電気も切れ、自動給餌器が動かなくなると鶏が置き去りにされてしまいました。今も再開できていません。

田口 本場に原発の影響は大きいですよ。

小山 全くです。それに、宮城県山元町の子会社は閉上の海辺にある一三棟の種鶏農場が土台だけ残して全部流されました。ひなも餌もないので、今も休業状態です。

しかし、全従業員七〇〇人を解雇しないためにも会社をなんとか再建しようと思いました。仕事がないので仕方なく、勉強会を行い従業員に参加してもらいました。給料は、行政による六割補償に加え、会社から三割出して従業員の生活を支えました。全国から卵を集めてひなを確保し、半年後に飼料工場が稼働して少しずつ生産が戻る中で、従業員の解雇はしないで雇用を維持しました。

内海 当時、私は仙台で販売会をやっていました。幸いなことに松島町は島がたくさんあって津波がまともに来なかったため、甚大な被害は免れましたが、雨水タンクが破裂して水浸しになり、ハウスの屋根やガラスが壊れてしまいました。
安部 宮城県沿岸地区の園芸ハウスは壊滅状態でしたよね。

内海 そうなんです。そこで、被害が比較的小さかった私どもができるだけ早く復旧して、宮城の園芸産地が健在であることをアピールするのが務めだと感じていました。

ただ、なかなか物資が入ってこないで、ハウスを建て直すための資材調達が難しく、あちこち駆けずり回り、忙しい業者に頭を下げまくって、なんとか五月の連休から工

事を始め、九月から出荷を再開することができました。

大泉 まずは国の支援を待つのではなく、自分でやってみよう、予算も何もない中で復興しようとしたのがポイントと感じました。

地域の人の協力あって

大泉 震災から五年という区切りを迎えますが、現状はどうなっていますか。

岩崎 うちの震災前の出荷量は普通か、それより少し上というレベルで、四五〇〇頭が最大でしたが、震災後、新しい農場を作ってバイオセキュリティーをしっかりと行くと、んでもなく出荷成績が向上しました。今は母豚二二〇頭に対し、年間六四〇〇頭を出荷し、生産面で見ると全国トップクラスです。震災四年目の昨年の決算で黒字になりました。養豚は、いかに病気のない状態を維持できるかに尽きると実感した次第です。

大泉 同じ畜産でも小山さんは生産が回復できていない状況ですね。今後、農場を増やしていくという方向になるのでしょうか？

小山 直営農場での規模復旧を考えていますが、地域との関係で立地が難しい。環境には、きちんと対応

しているのですがね。

岩崎 畜産は立地が難しいのは確かです。私の場合は、今の農場の近くに土地を確保して、なんとか経営しています。地元の人を雇用するなど、地域をうまく取り込んだ長期計画を作るとか、経営者はさまざまな努力が必要です。

大泉 岩崎さんは地域の人の手助けを受けて一歩を踏み出した、小山さんはなんとか従業員の生活を支えようと再建を進める中で畜産特有の課題が残ります。

安部 石巻管内でも一〇〇鈔を超える経営体は六つできました。規模化すればするほど、それに見合った作付け体系などを考える必要があります。うちの土地利用率は二二%と、フル活用していますが、地力低下が不安です。

田んぼ やっていけば当然有機物を投入しないといけないので、土作りを考えた作付けを実施しています。具体的には、養鶏農家からもらった堆肥を入れ、子実用のトウモロコシを作って養鶏農家に分けています。その養鶏農家から仕入れた卵をバウムクーヘンに加工しています。

大泉 内海さんもこの間、施設を拡大していますか？

内海 被災地では施設も大規模化が進んでいます。トマトもうちのよいうな一鈔の規模では小さくなってしまいました。そうになると、われわれは置き去りになってしまおうのではないかという想いに駆られます。そこで、たまたま、知り合った商社の方と一緒に施設を作り新会社として再スタートすることにしました。

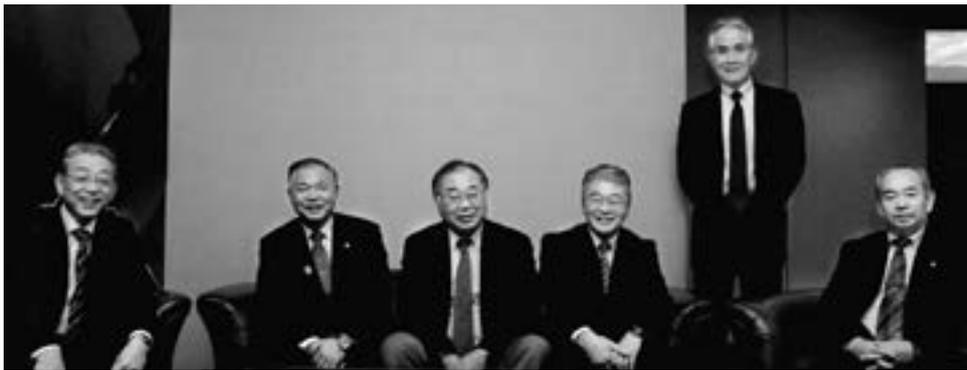
企業提携の強み生かす

大泉 企業と提携したのはなぜですか？

内海 グローバル化が進み資材も高騰して、農家はもう一人ではやっていけない時代が来ているのではないかと思えてきたからです。

私には規模を拡大する資金はないが技術がある、企業には資金はあるが技術がないということ、お互いの強みを活かせばいいのではと考えました。商社などの知恵を借りて提言を受け入れながら、財務的にも安定できる形でいくことが、地域への貢献にもなるのではないかと思っています。

田口 皆さんの被災時から現在までのお話を伺って、それぞれの経営者魂というものを感しました。被災



写真左（敬称略）から、内海、小山、大泉、岩崎、田口、安部（撮影：河野 千年）

直後、当然、茫然自失になってもおかしくないような状況でありながら、すぐに立ち上がった周りの人の協力も得て行動を開始されています。皆さんの「なにくそ、よし、やっ

す。

大泉 私も同感です。これからは規模拡大を進める畜産経営が全国でも多くなると思いますが、将来の展望についてはどうお考えですか。

岩崎 廃業する人が出てきているので、既設の農場を買い取って規模を拡大するケースが多く、新たに経営者が増えることはないのではないかと思います。

小山 私はこれから先、人手不足が規模拡大の大きなネックとなっていくと思っています。

これからの経営に道筋

岩崎 私の所では人手不足の問題はありませんが、規模拡大を見据え、今後ノウハウを持った人を雇う必要が出てきます。そのため、雇用体系などをきちんと整備しないと行けません。また、生産に特化して販売を維持するためには、HACC Pにも対応できる高度な衛生管理体制を整えていきたいと考えています。

小山 うちでは処理羽数一日四万羽の復活に向けて農場体制を早く再建したいと思っています。また、四〇年経過した鶏舎の更新も必要になっていて、次々に養鶏場を作っていくかなければならない状態にあり

ます。そういう意味で、土地と雇用の確保は非常に重要ですね。

安部 地域の再生、これが問題ですね。震災前八〇戸だった農家が、今は一法人四戸しかありません。地主が避難していてコミュニケーションが取れないので、年に一度集まつてお祭りをしています。

また、遠方に避難した高齢者たちが帰れるようにデイサービスを始めました。こういったものに利子助成とか財政の支援があると助かります。生産面では、野蒜地区は県内トップを切った除塩によって水田の表面はきれいになっていますが、地盤沈下して暗渠が効かなくなっているのが、早く復旧させてほしいと思っています。

内海 まだ、本格的に新会社が稼働したわけではないのですが、さらに規模を拡大していこうと考えています。これまでは、「松島トマト」というブランド名で売ってきましたが、そのブランドを強くアピールするため物量を確保できる仲間が必要になってきます。

また、私が海外に行った時に感じたのが、スーパーでのカット野菜の豊富さです。サラダ需要というのが海外でも増えるでしょう。そうなる

れられるのではないかと。商社との連携は海外展開にもメリットがあります。

田口 震災後の状況とは比べられません。今、日本の農業は大きな転換期を迎えています。こうした時に「ここで俺がやってやるぞ」と立ち上がる経営者にたくさん出てきていただきたい。皆さんにはそうした経営者の見本になっていただければと思います。

そして公庫も、そうしたマインドのある人たちに對して、「日本公庫が後ろについているから好きだけ好きなことをやってください」と言える存在でありたいと思います。

集中復興期間が終わり、資金の仕組みも少し変わるとは思いますが、私たちの取り組みは復興が最優先であることに変わりありません。これからも、しっかりと支援してまいりますので、よろしくお願いいたします。

大泉 困難に対しては前進しかないと、の感慨を感じました。しかも皆さん、効率的で、世界にも通用する経営のシステムを取り入れられています。それらが復興の必要条件になっていると同時に日本農業の再生の条件にもなるのではないかと感じました。

